

「おとととと……」

私は驚いて椅子から飛び上がった。あわててピアノに近寄りボリュームを下げた。なんという大音量なのだ。

いや、この盤のことである。スピーカーがびっくりして、臓物を吐き出すんじゃないかと思ったくらいだ。

CDにいっぱい詰まったヴィーナスの音のエネルギーの強力さにはいつだって驚き、そして敬意を払い、他のメーカーも真似してこの音量まで上げるように努力せよ。さすが「音のヴィーナス」だ。そのように思い詰めている私であるが、いや、このディスクにはまったくキモをつぶした。

1曲目に「ビューティフル・ラブ」がきている。もう50年くらいこの曲を聴いているが、いまだにぜんぜん飽きる気配がない。この曲さえ入っていればミュージシャンは誰であれ、見さかしく買ってしまう。ベースがドスーンと部屋の空気を震わせて、ヘイゼルタインのトリオはこのベースに乗り、そして包み込まれてゆくのだな、ということがまずわかる。そうして嬉しくなる。

ピアノ・トリオはまずドラムだと言う人が多いし、私自身もそのように信じているが、しかしこの演奏を聴くと、実際ベースというのは濃く大事なものだということがわかってくる。ピアノ・トリオの中のベースの音が豊かだと、聴いている人が豊かな気持ちになってくるのだ。共同作業をしているミュージシャンも同じだろう。

テーマのところ。ピアノとブラッシュを押しかけて、自分だけ前へ出たくてたまらないという演奏をする。スリリングそのものだが、ようし、それならお前さん、さっそくソロで前へ出たらどうだい。

まさにそんなふうにして、ベーシストはテーマのワンコーラスが終わるとソロへ突入するわけだ。

実は私は主題が終了すると同時にベース・ソロへ移行するという、よくあるパターンの、アレンジメントが嫌いである。せっかくいい曲を聴いて、そのいい曲のいいアドリブを聴こうとしているのに、なんだい、ベースが早くもしゃしゃり出てソロをとることはないだろう。

ところが、この「ビューティフル・ラブ」はぜんぜん嫌いじゃないのだ。

もう必然性そのものだからである。ベースがこの勢いなら早くもソロをとらせるしかない。しっかりとした、そういうシチュエーションなのだ。

2曲目の「スイート・アンド・ラブリー」になると、今度はドラマーがえらく目立った動きをしている。変拍子でテーマが奏され、これが誠に気持ちいいんだが、フツと4ビートに切り替わるタイミングがそれ以上に気持ちいい。4ビートの美味しさって実はこういうところにあるのだ、と気がかされるのである。最初から最後まで通しての4ビートだとこの快感はわからない。

こうしたアレンジメントは、親分のヘイゼルタインが考え出したこ



とだろう。そのアレンジメントが今回は濃く即興的なのだ。前もっての用意ではなく当意即妙のアレンジ。もはやアレンジの名に値しないかもしれない。

しかし、それがすぐれたアレンジなのである。アレンジ、アレンジしたものはすぐれてはいないのだ。気がかされないアレンジで今回は実に成功していると思う。

ヘイゼルタインについて、まずアレンジで誉め上げたが、この人のピアノは以前から不明であった。不明というのは誤解を呼ぶ言葉だが、要するに際立った特徴がない。特徴のないのが特徴と言ってもいいくらいで、そういえば、人間そのものもひっそりしており、いばった存在感がない。

日本人のジャズ・ファンの中では私はヘイゼルタインをずいぶん早くから見ているほうである。90年代の初頭にNYの「スモールズ」でエリック・アレクサンダーのグループにいた彼を目でつかまえている。その後エリックが日本で有名になり、何度か来日しているが、いまだに私はヘイゼルタインと言葉を交わしていないのだ。話しかけるきっかけが難しい。超然としているわけではないんだが、なにか話しかけてはいけないような肅然たる雰囲気を持っている。

しかし、次はうまくいきそうだ。

私はこの盤で彼に親しみを抱いたのである。音楽を聴いて演奏する人間に親近感を持ったのだ。

この盤の彼はよそよそしい感じが全然しない。彼の笑顔が見えてきた。全9曲のほとんどがよく知られたスタンダード・ナンバー、ということはない。

つまり、演奏、なのである。プレイがフレンドリー。心おきなくスイングしているのだ。無邪気にプレイに邁進しているのだ。楽しそう

にはしゃいでいると言ってもいい。いま一つよくわからなかったヘイゼルタインが、ここでしっかりと正体を明かしたのである。

これまでのヘイゼルタインの盤の中で、いちばん私は彼がよくわかった。よってこの盤は私の中でベストなのである。今後、ヘイゼルタインと言われたら、このディスクをトップに挙げることにしよう。ちなみにこれまではDIW発の『クラシック・トリオ』だった。

なにしろ、演奏がはち切れる感じなのである。うれしくてたまらないという3人共同のプレイである。3人がびったんこ気持ち合ってしまつて、目が合ったら笑わずにはいられないという仕事ぶりである。

こうして書いているうちに曲は9曲目の「テンダリー」に差しかかっている。いいなあ、このリズム。こうしたりズムはともすると軽く、そして陳腐になりがちなのに、ヴィーナスの音だとそうはならないから不思議だ。

それにしても、ビリー・ドラモンドのシンバリングは手が着けられないくらい旨い。私が彼のシンバリングで最高!と思うのは、ステープ・キューンの『ワルツ~ブルーサイド』2曲目の「シャレード」の空中に飛び散り、乱舞するシンバリングだが、あの華やかさは今回は見られないにせよ、片鱗はそこかしこに見発見できるではないか。小さな華やかさ、だ。

ビリー・ドラモンド。シンバルも旨いが、嫁さん獲得も旨いのである。

あの、リニー・ロスネスである。超のつく美形。いつだったか青山のボディ・アンド・ソウルのステープ・キューン・コンサートでこの件に関し、ビリー・ドラモンドについ羨ましくて「アイ・エンビー・ユー」と言ったらケラケラ笑っていたっけ。

美的な意味で、これまでのヴィーナス盤の中でシンバルの音が、私のスピーカーの場合、最も麗しく聴こえてくる。

なぜだろう。CDをよく見たら、録音エンジニアが以前と違う人になっている。ジェイムス・ファーバーである。ジャズ録音のベテランの人だ。たぶんヴィーナスでは初めての人だろう。ジェイムス・ファーバーの録音とキタムラ~ハラのマスタリング兄弟の思想、そしてテクニクがびっちり一致したに違いない。

力があって美しい。こういう音を聴かされると、次もまたジェイムス・ファーバーでやってくれと言いたくなってくる。

ぜひ、頼みます。

最後にもう一度、タイトル曲を聴こう。

いや、ほんと、シンバルの旨いこと。こういうのをシンバルが歌っていると言うんだ。いや踊っているんだ。ジュワーンというハイ・ハット・シンバルのサウンドの小気味よいこと。

これはくせになりそうだ。

寺島靖国